

## 「大阪万博」ワークショップ

写真は「大阪万博」を考える 市民からのアセスメント提案という、ワークショップ案内。今日 27 日、第 3 回「大阪万博に求められるアセスメントとは」が鶴見緑地公園なにわ ECO スクエアで開催される。

私もコメンテーターの一人として参加する。コメントを準備していたとき、5 月 11 日に夢洲に初上陸して、その感想を主催者の大阪自然環境保全協会に送ったことを思い出した。コメントに関係するので、途中から紹介したい。



夢洲に「上陸」して感じたことを 2 点だけ書きとめたい。

第 1 に、埋立中の広大な夢洲でコンテナやソーラーパネルなど、活発な経済活動が行われていることだ。ゴミ処分場を含めて、夢洲は「負の遺産」などではない。土曜日なので少なかったとはいえ、猛スピードで走るダンプを見ていると、「IR」という名のカジノや万博などと「共存」できるのか疑問に感じた。

第 2 に、夢洲が「生物多様性のホットスポット」であることを、水辺の野鳥などから実感できた。愛知万博の当初の会場予定地「海上の森」という里山とは違う、大阪湾に作られた貴重な自然環境スポットとして、その価値を評価しなくてはならない。これまでカジノや災害から、夢洲での万博開催の「リスク」を考えてきたが、大阪湾の長期的な自然環境保全という視点からも問題を考えていきたい。

夢洲の都市計画変更素案のパブリックコメントでも、空間軸と時間軸の両面から夢洲開発の問題点を指摘した。カジノなど「国際観光拠点」整備とコンテナ埠頭としての港湾機能との共存について、段階的整備と施設間の関係、道路などのアクセスについて問題を提起した。「開発ありき」「万博ありき」の都市計画変更疑問を投げかけた。

夢洲の環境アセスメントでも、愛知万博の経験も活かしながら、夢洲の自然環境を多面的に調査して、連続する開発の環境への影響を明らかにする必要がある。とりわけ夢洲の土地利用計画と段階的整備を見据え、災害リスクも含めて空間軸・時間軸からの総合的な環境影響評価が求められる。

ワークショップのコメントでは、愛知万博アセスの経験を踏まえ、会場予定地の大阪湾の人工島「夢洲」特有の問題について問題を投げかけたい。とりわけ夢洲の災害リスク、カジノやコンテナ埠頭と隣り合わせの空間・時間軸、アクセスに焦点をあてたい。

(2019 年 7 月 27 日)